宮本常一に学ぶ
地域振興のエッセンス

『宮本常一
民俗学を超えて』
木村哲也 著
（岩波書店、1056円）

渡部 晶 わたべ・あきら
1963年福島県平市（現・いわき市）生まれ。京都大学法学部卒。1987年大蔵省入省。財務省大臣官房地方課長、沖縄振興開発金融公庫副理事長、財務省財務総合政策研究所長などを歴任し、2024年7月退官。いわき応援大使、2024年3月放送大学大学院修士（学術）、日本政策投資銀行設備投資研究所上席主任研究員。

いまだに著作集の刊行がつづく宮本常一の膨大な仕事は、アカデミアから「実証的でない」などの評価を受けてきた。著者はそれを逆手にとって、宮本の著作から影響を受け、戦後の一時期に日本で大きな影響力を持った鶴見俊輔、網野善彦、本多勝一、司馬遼太郎らいわゆる「朝日岩波文化人」の軌跡を取り上げることによって、宮本のつきない魅力、豊かな発想に迫ろうとしている。

評者の大学生時代（1980年代後半）は阿部謹也や網野善彦らによる社会史が盛んで、その影響で1984年に岩波文庫に入ったばかりの宮本常一の代表作『忘れられた日本人』や『家郷の訓』を読んだ。その後、第28回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した『旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三』（佐野眞一著）は、戦後、大蔵大臣をして自宅を財産税で物納した逸話を持つ渋沢敬三と宮本常一の関係を描いた大変印象的な一冊であり、宮本に対する一般的な評価に寄与したとされる。

では、本書はどうか。地域振興との関係でとくに意義深いと感じたのが「第二章 世間師の発見―安丸良夫と民衆思想史」と「第四章 離島から日本を見る―谷川雁のコミューン構想と島尾敏雄の『ヤポネシア』論」だ。まず第2章では歴史学者の安丸良夫が、宮本が豊富なフィールドワークで見出した「世間師」を江戸時代の百姓一揆などの指導者に重ね合わせたことを指摘。今でいうところの越境学習をした人のことであり、今の地域でも求められている人材である。ついで第4章では、宮本が離島振興法の制定にかかわったことにも触れつつ、その著作『日本の離島』の影響を受けた谷川のコミューン論、島尾の日本文化論の見直しを提起した「ヤポネシア」論を展開している。

渋沢敬三が宮本にいったとされる「大事なことは主流にならぬことだ。傍流でよく状況を見ていくことだ。舞台で主役をつとめていると、多くのものを見落としてしまう。その見落とされたものの中に大事なものがある」という助言は地域振興にかかわる者にとっても、つねに立ち返るべき金言だろう。著者の『宮本常一を旅する』もあわせて一読をオススメする。